The Sixteenth Aomori International LGBT Film Festival

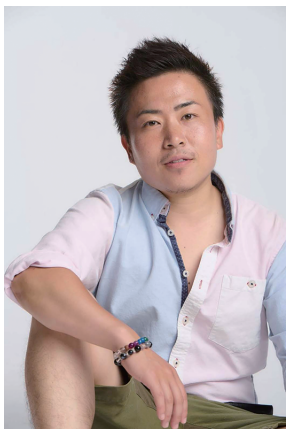
プログラム内容

❶ I Am Here ～私たちは ともに生きている～ (59 分) 13:00～14:05

❷ ハーヴェイ・ミルク (87 分) 14:25～15:55

❸ 世界は僕らに気づかない (112 分) 16:15～18:10

『I Am Here ～私たちはともに生きている～』監督　浅沼智也さんよりメッセージをいただきました



青森インターナショナルLGBTフィルムフェスティバル開催おめでとうございます。

トランスジェンダーもそうでない人も今も昔もともに生きています。日本でもトランスジェンダーの人達に対する偏見や不安を煽る言説がソーシャルメディアを中心に広がっている中で、ともに生活をしているトランスジェンダーの想いや日常生活での困難なことや法制度の問題などを多くの人達に知ってほしい・カミングアウトの有無に関わらず、全国各地にいるトランスジェンダーの人達にエールを届けたいと思い制作をしました。

性別移行をすることは精神的・身体的・金銭的にも負担が大きく、命に関わることもあります。当事者は就職活動や医療アクセスや日常生活など色々な場面で見た目で性別を判断されることや他者から性別を問われることがあり、自分らしく生活をしたいと思っていても社会側から抑圧を受けることもあります。昨今LGBTQという言葉が社会的に浸透しましたが、当事者たちが生きやすい社会とは言い難いです。是非、この映画をきっかけにトランスジェンダーについて考えてみませんか??

トランスジェンダーの人達が生きやすい社会は誰もが生きやすくなる社会の一歩です。

『世界は僕らに気づかない』監督　飯塚花笑さんよりメッセージをいただきました

この世界の片隅で、ある種の生きづらさを抱える人たちの存在がどうしても気になってしまう。おそらくトランスジェンダーである自分自身のアイデンティティがそうさせて来たのだろう。今回の映画の主人公は、フィリピン人の母と日本人の父親を持つ青年だ。意外にも知られていないがこの国には、出稼ぎでやって来た沢山のフィリピン人女性が、日常に溶け込んで暮らしている。そしてその子どもたちもまた、この国の中で暮らしている。

この映画で描くのは、異なる文化を持った母親への息子の眼差しであり、“愛の問題”についての物語である。また、この映画が完成し公開してからもこの社会の中であらゆる差別や偏見を目にし続けている。こんなときの為に映画のラストには“束の間の”ハッピーエンドを用意している。

この映画を観て、身近にあった愛に気づく人がいるならば…そして、誰かの心が軽くなるならば…そんな願いを込めてこの映画を贈ります。